

[野 菜]

1. 概 況

平成 17 年は、2～3月は低温傾向、4月以降は高温・乾燥傾向でハダニ、コナジラミ類、うどんこ病、ウイルス病等の発生が多かった。秋口から初冬にかけて高温で経過したが、その後は一転して低温で推移した。台風の影響は比較的少なかったが、9月上旬の台風 14 号により九州南部では施設及び露地とも大きな影響を受けた。

2. 果菜類

1) 促成イチゴ（福岡、佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島）

品種動向：福岡は「あまおう」、佐賀は「さがほのか」への更新が進み、長崎は平成 18 年度までに「さちのか」に転換予定である。依然として「とよのか」が主体の熊本、大分、鹿児島では「さがほのか」が増加傾向にあり、熊本では「ひのしずく」や「さちのか」も栽培されている。新品種に対する期待は相変わらず大きい。

平成 16 年度産：8月末からの度重なる台風により育苗施設や苗に被害を受けて炭そ病の発生がみられ、また圃場準備の遅れから定植が大幅に遅れたため、年内出荷量が大幅に低下し、出荷量は前年をやや下回った。

平成 17 年度産：宮崎では台風の影響で定植が遅れたが、全体的には定植前後の天候に恵まれほぼ順調な生育で推移した。しかし、高温が続いたことから炭そ病の発生が多く、また出荷初期は小玉傾向であった。12月の寒波により生育が停滞し、第1次腋花房に遅れがみられ、年内～1月上旬の出荷量が低下傾向にある。

2) トマト

冬春栽培（福岡、佐賀、長崎、熊本、宮崎）：促成栽培では「ハウス桃太郎」「感激 73」「麗容」等、多くの品種が栽培されている。平成 16 年度産は、定植期に台風被害がみられ、また年内の高温による中段の着果不良や乱形果、生育前進化により収穫終了が早まる傾向にあった。平成 17 年度産は、気象災害もなく初期生育は順調であったが、一部で育苗期の高温による第1花房着生節位の上昇、12月の低温による生育停滞がみられる。抑制栽培では、TYLCV 対策のため播種期を少し遅らせたが、コナジラミ回避対策のために細目ネットで被覆したハウスでは高温による低段花房の着果不良がみられた。

夏秋栽培（大分）：「桃太郎ファイト」「桃太郎 8」等が栽培されている。定植後の天候は恵まれたが、夏期にはハウス内高温による着果不良がみられ、また9月上旬の台風により雨よけ施設では倒壊等の被害があり、生産量は減少した。

トマト黄化葉巻病：防虫ネットや薬剤防除の徹底により被害回避に努めているが、発生地域は九州全域で拡大が進行している。

3) ナス

促成栽培（福岡、佐賀）：「筑陽」の接木栽培（台木品種「台太郎」「トナシム」「トレロ」等）が行われている。平成 16 年度産は、台風のため定植遅れや茎葉の損傷がみられたが、その後順調に回復し、出荷量は前年並みであった。コナジラミ類やすずかび病の発生が多かった。平成 17 年度産は、定植期から天候に恵まれ初期生育は順調で、出荷量も多かったが、12月の低温・寡日照により草勢が低下した。コナジラミ類、ハモグリバエ、スリップス類の発生が多い。

4) ピーマン

促成栽培（宮崎、鹿児島）：平成 16 年度産は、初期に台風被害があったが、その後ほぼ順調に回復した。しかし、うどんこ病やスリップス類、コナジラミ類の発生がみられ、また、宮崎県では4月以降に「黒枯れ病（仮称）」の発生が多かった。平成 17 年度産は、宮崎で台風により定植が遅れた。疫病、コナジラミ類、アザミウマ類、うどんこ病、青枯れ病、黒枯れ病等の発生がみられるが、生育は全般的に順調である。

夏秋栽培（大分）：「さらら」「みおぎ」が栽培されている。好天に恵まれ生育は順調に推移した。高温による日焼け果やうどんこ病、スリップス等が発生し、一部に黄化えそ病の発生がみられるが、収穫量は前年並みであった。

5) キュウリ

促成栽培（宮崎）：定植期の高温により、中位～下位葉に黄化症状（苦土欠）による草勢低下がみられる。

抑制栽培（佐賀，宮崎）：佐賀では，天候に恵まれほぼ順調な生育だが，初期から黄化えそ病や黄化症（ZYMV）が散発した。宮崎では，台風により定植が遅れ，初期生育はほぼ順調であったが，褐斑病，べと病，うどんこ病等の発生がみられる。

夏秋栽培（宮崎）：8月中旬までは天候に恵まれたが，9月上旬の台風14号により被害を受けた圃場も多かった。少雨傾向のため生育が遅れ気味で，褐斑病，炭そ病，アザミウマ類，ホコリダニ類等の発生がみられた。

6) スイカ（熊本）

春夏栽培：1～3月の日照不足により生育が遅延し，特に2月の交配期の日照不足の影響による着果・肥大不良のため，3～4月の出荷量は大幅に減少した。5月以降は，着果不良による植え替え栽培も加わり，出荷量は前年を大幅に上回った。

7) メロン（熊本）

春夏栽培：「クインシー」「アンデス」「アールス」等が栽培されている。1～3月の日照不足により生育が遅延し，特に2月の交配期の日照不足による着果・肥大不良がみられ，また果実品質（ネット発現等）の低下もみられ，4月の出荷量は大幅に減少した。

8) カボチャ（鹿児島）

春栽培：3月の低温により生育が遅れ，4月以降は天候に恵まれて果実肥大が進んだものの，出荷は例年よりやや遅い6月中旬ピークとなった。出荷量は多かったが，他県産や輸入物と競合したため，単価は低く推移した。

秋栽培：9月上旬の台風14号により，茎葉損傷やまき直し等の被害が発生し，着果不良や小玉傾向のため収量は低かった。

9) ニガウリ

沖縄：冬期の施設栽培では「汐風」が普及している。促成栽培では，10月中下旬の台風により植え付けが遅れてたものの，11～12月の気象条件に恵まれ生育は順調であった。半促成栽培では，2月の曇天により初期生育が抑制されて収穫期が遅延したが，本島では台風被害がなく作柄はほぼ順調であった。普通栽培では，施設で「群星」，露地で「島風」が普及している。4～7月にウイルス病による奇形果の発生がやや多かった。

長崎：イチゴ後作として，施設栽培（品種：「えらぶ」）が県内各地に拡大している。

大分：夏秋栽培に「えらぶ」が導入されている。9月上旬の台風までは天候に恵まれ，8月までの出荷量は多かった。

10) トウガン（沖縄）

促成栽培では「ヘルシーボール」，普通栽培では在来種が栽培されている。一部に細菌性の腐敗病がみられるが，作柄はほぼ順調である。促成栽培には耐風性施設の導入が進んでおり，栽培面積は増加傾向にある。

11) サヤインゲン

長崎：露地抑制栽培が主体だが，ハウス抑制栽培による継続出荷も一部にみられる。品種は「サーベル」「ステイヤー」「スーパーライト」等で，単価は比較的堅調である。平成16年度産は，台風による減収が著しかった。平成17年度産は，は種は順調に行われたが，台風14号の影響を受け，出荷量は前年より減収の見込みである。

沖縄：つる性種では「ケンタッキーブルー」，わい性種では「キセラ」「サーベル」が栽培されている。平成16年産は，10月中下旬の台風による植え替えやは種遅れ等により，年内出荷量が減少し，また2月の曇天により生育が遅延したが，作柄は全般に順調であった。平成17年産は，年内～年明けかけてシルバーリーフコナジラミの加害による莢の白化症状がみられ，また平張り施設では菌核病の発生が多いが，登録農薬が少ないため防除に苦慮している。

12) ソラマメ

鹿児島：「ハウス陵西」「陵西一寸」が栽培されている。平成16年度産は，台風による播種の遅れ，茎葉の折損や塩害，病害の発生がみられ，一部の産地では播き直しも行われたが，栽培面積は減少した。11月下旬からの出荷となり，年内は暖冬傾向のため出荷数量は平年並であったが，1～3月の低温寡日照により着莢不良や発育不良莢の発生が多く，収穫ピークが遅れ，収穫量も減少した。平成17年度産は，台風の影響もなく順調には種されたが，10月中旬からの開花期の気温が高かったため，下位節の着莢が悪かった。

長崎：五島を中心に島原や平戸で産地が拡大してきたが，近年は鈍化傾向にある。平成

17年産は、定植期以降の低温により生育が遅延しており、春期の出荷遅延が予想される。品種は「陵西一寸」で、現行のU字四本仕立に代わりL字三本仕立が増加している。

13) 実エンドウ（鹿児島）

「スーパーグリーン」「ミナミグリーン」「南海緑」等が栽培されている。平成16年度産は、播種はほぼ例年並であったが、台風による茎葉の折損や塩害等が発生し、出荷はやや遅れ気味であった。2～3月の寒波により寒害が発生し、4月の収量が減少した。平成17年度産は、台風の影響もなく順調には種され、10月の少雨で一部に草勢低下が見られたが、生育はほぼ順調である。

3. 葉根菜類

1) アスパラガス（佐賀，長崎）

品種は「ウエルカム」が栽培されている。春芽の収穫量は、前年の台風被害により貯蔵養分が少なかったことに加え、2～3月の日照不足や低温の影響を受けて、前年を大幅に下回った。しかし、早めの立茎により夏芽の収穫量は大幅に増加し、全収量は前年並みであった。夏芽の単価が安いことから、春芽の収量を増加させる栽培技術が検討されている。スリップス対策に紫外線カットフィルム，ヨトウムシ対策に防虫ネット，高温対策にフルオープンハウス等の普及が進んでいる。

2) ネギ

小ネギ（福岡，大分）：主要品種は、周年用に「鴨頭」，夏作に「FDH」「夏彦」「葉王」等，冬作に「FDH」「雷山」「秀次郎」等である。気象災害もなく順調な生育であったが，7～8月の高温・乾燥と12月の低温により出荷が減少した。産地では，耐候性ハウスや防虫ネットの普及が進んでいる。

白ネギ（大分）：「長宝」「ホワイトタワー」「宏太郎」等，多くの品種が栽培されており，固定品種に加えてF₁品種が拡大している。シロイチモジヨトウやネキリムシ，黒斑病の発生が多く，また5月の少雨，7月の豪雨，9月の台風14号，12月の寒波と積雪等が生育に影響したが，収穫量は平年並みであった。シロイチモジヨトウ等の防除のための黄色蛍光灯及び全自動定植機の普及が進んでいる。

3) タマネギ（佐賀，長崎，宮崎）

苗の生育は良好で，定植も順調に行われている。12月の低温で生育はやや停滞したが，11月まで高温で推移したため，極早生品種の年内生育は進んでおり，早いところでは1月初旬から出荷が始まっている。

4) ニラ（大分）

品種は「スーパーグリーン」が主体である。夏作は，天候に恵まれて多収であった。冬春作は，株養成時の高温乾燥によりスリップスやさび病の発生が多かったが，生育はほぼ順調である。

5) ブロッコリー（長崎）

県北地域や壱岐で拡大しているが，台風により年内出荷はかなり減少した。

6) レタス（大分）

春作：品種は「パークレー」「ステディー」「マイヤー」が主体であり，高温乾燥気味に推移したため，病害虫も少なく生育は順調であった。

秋作：品種は「ケイズル」「マイヤー」「ジャングル」等が主体であり，一部で台風の被害を受けたが，全体としては平年並みの出荷であった。

7) ニンジン

長崎：平成16年度産は，台風により作付面積が大幅に減少した。品種は「向陽2号」を主体として，作型分散のため「紅楽」「黒田5寸」等も栽培されている。平成17年度産では，「ベータ312」「愛紅」が一部に導入されており，生育は全般に順調である。近年，島原や県央地区で生育障害（寸詰まり症とよばれる短根ニンジン，豚鼻症状を呈する変形ニンジン）の発生がみられているが，平成17年度産では発生は少ない傾向にある。

宮崎：露地及びトンネルとも加工用原料栽培が主体であるが，台風被害により収量は平年の2～3割減が見込まれる。

8) ダイコン（宮崎）

加工用（生漬け，干し漬け，切り干し）の国内有数の産地であるが，生産面積は減

少傾向にある。9月上旬から10月上旬のは種期に台風による被害を受け、まき直しを余儀なくされ、茎葉も損傷を受けたため、収量は平年の2～3割減が見込まれる。偏西風が例年より遅い上に弱く、干し加工作業が遅れた遅れ気味であった。

9) ゴボウ (宮崎)

春まきは畑露地、秋まきは畑トンネル及び水田トンネル、品種は「山田早生」「柳川理想」であり、各作型とも生育は順調であった。水田ゴボウは増加傾向にある。

10) バレイショ

長崎：春作は、2月下旬の寒害と3月からの天候不順で生育が遅れ、小玉傾向で収量は減少した。秋作は、夏期の高温により定植が遅れ、その後の干ばつ傾向によりいも数が少なく、大玉傾向であるが収量は少ない。新品種「アイユタカ」の普及を促進中である。

宮崎：春作及び秋作とも製菓会社との契約栽培が増加している。

鹿児島：春作は、1～2月の低温寡日照及び2～3月の寒害により収量が低かった。秋作（熊毛、大島）は、12月の低温により生育遅れがみられる。

(九州沖縄農業研究センター野菜花き研究部 望月龍也)